

原著 (Article)

保育活動における童謡・唱歌の機能

Functions of Doyo and Shoka in Kindergartens and Nursery schools

太田 央子*・山中 文**・渡邊 康**

OTA, Hisako*

YAMANAKA, Aya**

WATANABE, Koh**

摘 要

童謡・唱歌の先行調査を追調査し、歌い継がれていない歌・歌い継がれている歌や保育者によるその理由を確認するとともに、それらの結果について、幼児の表現にとってどのような学びや体験になるのかという視点から再検討した。童謡・唱歌の先行調査では、調査対象者の中で若い世代に行くほど童謡・唱歌を知らないこと、どの年代においても保育現場で用いることが少なくなってきたこと等が示されている。本研究では愛知県で追調査を行い、愛知県では先行調査とほぼ同様の傾向が見られるものの、さらに先行調査よりも歌われない童謡・唱歌が多く、また保育現場でそれらを歌われなくなったと感じている保育者が多いことを明らかにした。本稿では、さらにそのような追調査結果をもとに、童謡・唱歌における音楽構造や保育展開の課題を明らかにし、大人と子どもの音楽的コミュニケーションや子どもの表現素材としての童謡・唱歌の機能について述べた。

キーワード：唱歌，童謡，子ども，質問紙調査

Key words : shoka, doyo, child, questionnaire survey

はじめに

平成29年には、『幼稚園教育要領』、『保育所保育指針』、『幼保連携型認定こども園教育・保育要領』が同時改訂され、改訂された幼稚園教育要領においては、幼児期に育てたい力が明示された。さらに、平成29年に改正された教育職員免許法施行規則においては、幼稚園教諭の普通免許状の修得にかかわって、改正前の「教科に関する科目」（小学校の国語，算数，生活，音楽，図画工作，体育）が「領域に関する専門的事項」（幼稚園教育要領で定める健康，人間関係，環境，言葉，表現）となった¹⁾。これに伴って文部科学省が示したモデルカリキュラム²⁾において、「領域に関する専門的事項」の科目「幼児と表現」では、全体目標で「幼児の表現の姿やその発達及びそれを促す要因，幼児の感性や創造性を豊かにする様々な表現遊びや環境の構成など

* 名古屋医療秘書福祉専門学校 ** 椋山女学園大学教育学部

本論文は椋山女学園大学教育学部紀要の投稿・執筆規程2に基づき査読を受けた（2017年12月11日受付；2018年1月10日受理）。

の専門的事項についての知識・技能，表現力を身に付ける」と示された。これらは、幼児期の教育の専門性が強調され、幼児が表現する姿から遊びや環境を構成していくことの重要性が示されたものとみることができよう。

一方で、領域「表現」における保育現場の教材に関する研究には、必ずしも幼児が表現する姿からではなく、歌い継がれている歌の調査や教材研究などに文化財的視点から追究するものも多くみられる。たとえば、武藤は「子どもに歌を教えるということは文化の継承でもある。大人が素晴らしさや親しみを感じている歌を、次の世代へ伝えるのであるから、長い間良い歌だとして歌われてきている曲を伝えることが大切である」と述べている（武藤：2008，55）。また、笠井らは、「詩と曲が生かされた日本の歌」「歌でつながる人と心，歌の持つ力」「家族や友だち，仲間同志など一緒に歌うこと」「みんなで共通にまた世代を超えて歌うことの復活」という4つの課題から、保育者志望の学生に『親子で歌いごう日本の歌百選』³⁾の曲の調査等を行っている（笠井・久原：2010，17）。このような視点は、その典型であろう。保育現場で「歌い継」いでいくということと、幼児が表現する姿から幼児期の教育を捉えていくこととは、どのように結びつくのであろうか。

梁島は、幼児の音楽教材研究について、教材そのものの分析だけでなく、分析の目的に「その教材や要素を、環境として与えられる子どもたちが、それらによって何を学び何を体験できるか、という視点がなければならない」（梁島：1991，147）と述べている。梁島の視点は、幼稚園教育要領等の改訂や教育職員免許法施行規則等の改正が行われ、現代における幼児期の保育・教育の方向性が示された現在、あらためて教材研究に必要な視点であると考えられる。

本稿は、以上のような観点から、歌い継がれている歌の調査を追調査し、歌い継がれていない歌・歌い継がれている歌や保育者によるその理由を確認するとともに、それらの結果について、幼児の表現にとってどのような学びや体験になるのかという視点から再検討することを目的とする。

I 歌い継がれている歌の追調査

水野らは、2016年、保育現場における童謡・唱歌離れ現象について、「保育における童謡・唱歌離れ現象Ⅰ—保育者に対する調査を中心に—」において発表を行っている⁴⁾。これは、千葉県、茨城県、静岡県、沖縄県で質問紙調査を行い、397名の保育者からの回答を元にした調査結果である。水野は、さらに、保護者への調査も行い、あわせて「幼稚園・保育所・家庭において幼児が親しんでいる音楽の分析—童謡・唱歌離れ現象をめぐる—」にまとめている（水野：2016）（以下、これを「水野らの調査」と示す）。

前掲のように保育現場で歌われている教材の調査研究はいくつか存在するが、歌い継がれている歌について、最近の調査でありなおかつ複数の県にわたって幅広く調査

しているものは水野らの他に見当たらない。水野らの調査は、最近の保育現場における一定の童謡・唱歌の存在状況を明らかにしているものと考えられる。したがって、本研究では、水野らの調査を歌い継がれている歌の代表的な調査であるととらえ、愛知県においても水野らと同様の結果が得られると仮定して、水野らの調査項目をもとに追調査を行った。

なお、水野らの調査においてはさらに保護者に対する質問紙調査や幼児に対する直接面接調査を行っているが、本研究においては、保育者に対する調査に限定した。

1. 対象・方法

(1) 調査対象者

愛知県の名古屋市（8園）、蒲郡市（18園）、知多市（17園）の幼稚園または保育所の園長、主任教諭、担任・副担任を担当している保育者350名を対象とした。保育者の年代の内訳は、20歳代45.5%（159名）、30歳代19%（67名）、40歳代以上35.5%（124名）であった。

(2) 調査手続き

愛知県で2017年1月から3月にかけて開催された名古屋市、蒲郡市、知多市の園長・副園長を対象とした研修会（各1ヶ所）に調査者が参加し、研修会に参加した園長・副園長の所属園に調査用紙を送付する許可を得、それぞれの幼稚園ならびに保育所へ自記式の質問紙と返信用封筒を配布し、郵送による返送を求めた。調査内容は、調査結果を比較するため、水野らの調査内容と同じ内容とした。なお、データは統計的に処理をし、園名ならびに個人名が特定されることは無い旨を伝え、質問紙および返信用封筒には、園名および氏名を記入しないよう求めた。回収時期は、2017年1月～5月である。

(3) 調査項目

本調査は、水野らの調査の追調査であるため、調査項目および調査結果の処理については、水野らのそれにならった。

調査項目は、以下のとおりである。

- ① 提示した唱歌・童謡を歌うことができるか
- ② 過去2、3年の間に保育活動の中でそれらを歌ったことがあるか
- ③ 調査時点1ヶ月までに保育活動に取り入れた歌はどんな歌か
- ④ テレビやアニメの曲で保育活動に取り入れている曲は何か
- ⑤ 古くからある歌をアレンジして歌うことがあるか
- ⑥ 日本に古くからある童謡や唱歌を最近の保育の中で歌わなくなったと感じるか
- ⑦ 保育の中で童謡・唱歌が歌われなくなってきた理由は何か
- ⑧ 保育活動で歌を取り入れる際に重視する事項

2. 結果と考察

(1) 保育者が歌うことができる童謡・唱歌について

水野らの調査で示された楽曲は、図1に示しているように、1965年以前（水野らの調査時期から50年以上前）に作詞・作曲された創作童謡あるいは唱歌のうちから選んだ30曲である。本調査では、同様の楽曲を示して、調査項目①を問うた。

その調査結果は図1のとおりである。図1は、歌うことができるとした回答数の年代別割合を示している。「どんぐりころころ」だけは、どの年代も100%の保育者が歌えると回答している。また、40歳以上の保育者において7割以上が歌えると回答した曲は30曲中29曲であり、7割以上の回答が得られない曲は「すずめの学校」のみであった。30歳代では28曲であり、7割以上の回答が得られない曲は「すずめの学校」と「赤い靴」であった。20歳代では23曲であり、「すずめの学校」「赤いくつ」

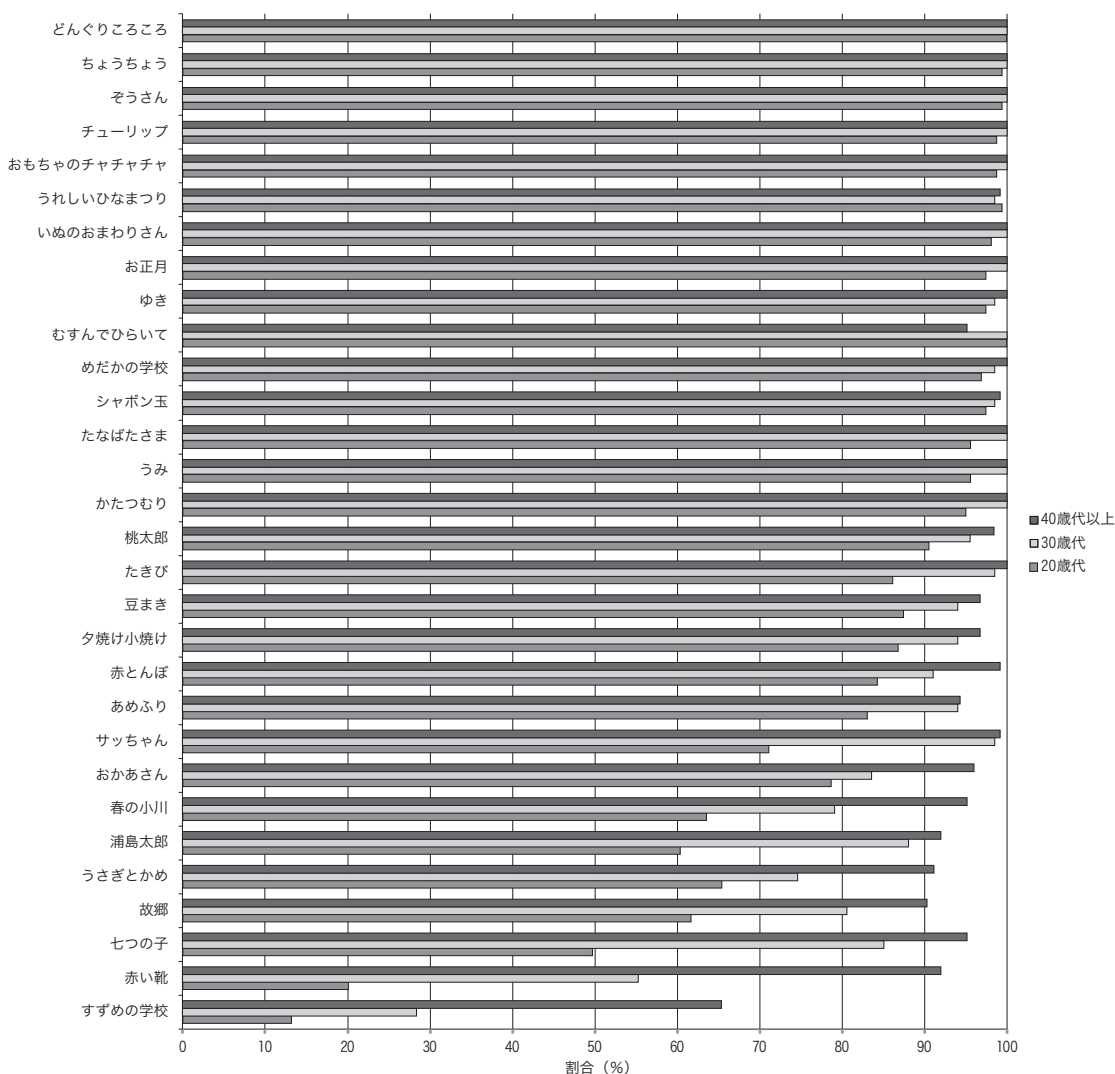


図1 保育者が歌うことができる割合

に加え、「七つの子」「故郷」「うさぎとかめ」「浦島太郎」「春の小川」となっている。

水野らの調査では、どの年代の保育者も100%の割合であった歌が「ぞうさん」「かたつむり」「いぬのおまわりさん」「どんぐりころころ」「たなばたさま」「むすんでひらいて」「チューリップ」の7曲であったのに対して、本調査では「どんぐりころころ」の1曲だけであった。また、水野らの調査では、40歳代以上では7割以上の保育者が30曲全てを歌うことができると回答しており30歳代で28曲、20歳代で26曲であったのに対して、本調査では、先にあげたように40歳代以上で29曲、30歳代以上で28曲、20歳代以上で23曲であった。

本調査で30歳代の保育者が歌えるという回答が7割を下回った「すずめの学校」と「赤い靴」の2曲は、水野らの調査の30歳代の結果と一致する。また、同様に本調査の20歳代で7割を下回った「すずめの学校」「赤い靴」「春の小川」「浦島太郎」の4曲は、水野らの調査の20歳代の結果と一致する。本調査では20歳代で、さらに「七つの子」「故郷」「うさぎとかめ」の3曲があがっている。

つまり、保育者が歌うことができる童謡・唱歌については、歌うことができる割合が7割に満たない曲は両調査で重なっており、さらにその曲数において、本調査の方が上回っている。

(2) 過去2、3年の間に保育活動の中で歌ったことがある童謡・唱歌について

調査項目②は、①と同じ30曲を示して問うている。結果は、図2に示した通りである。図2は、過去2、3年の間に保育活動の中で歌ったことがあるとした回答数の年代別割合である。歌ったことがあるという回答数が多い曲は、「たなばたさま」「うれしいひなまつり」「お正月」「豆まき」といった季節の行事に関するもの、「チューリップ」「むすんでひらいて」「どんぐりころころ」「ちょうちょう」「かたつむり」などの季節ともかかわって具体的に歌詞内容がイメージしやすいものであった。これらの曲の多くにおいては、歌っている保育者は30歳代が多く、次いで20歳代、40歳代の順になっている。

歌ったことがあるという回答数が少ない曲には、①の結果において20代で7割以下であった7曲（「すずめの学校」「赤い靴」「七つの子」「故郷」「うさぎとかめ」「浦島太郎」「春の小川」）がすべて該当している。また、①の回答でどの年代も7割以上が歌えるとなっていながら②の回答でどの年代も5割を下回る曲として、「たきび」「あめふり」「めだかの学校」「赤とんぼ」「おかあさん」「桃太郎」「夕焼け小焼」がみられる。また、「うさぎとかめ」は①において30代、40代の保育者は7割以上が歌えると回答した歌であったにもかかわらず、保育活動中においてはどの年代においても歌ったことがあるとする回答は3割以下である。つまり、「桃太郎」「うさぎとかめ」「浦島太郎」といった昔話にかかわる歌は総じて低い。

この調査項目については、水野らの調査においても、本調査結果にみられる「たなばたさま」「うれしいひなまつり」「お正月」「豆まき」といった季節の行事に関するもの、「チューリップ」「むすんでひらいて」「どんぐりころころ」「ちょうちょう」

「かたつむり」などの季節とも関わって具体的に歌詞内容がイメージしやすいものが上位に入っている。また、水野らの調査において全ての年代で5割を下回った曲は9曲であり、本調査の15曲より少ない。水野らの調査の9曲は本調査の15曲に含まれる歌と同じであり、本調査では、さらに、「うさぎとかめ」「桃太郎」「おかあさん」「めだかの学校」「あめふり」の5曲が加わっている。

つまり、保育活動中に歌われたことのある童謡・唱歌についても、歌ったという回答が多い曲や少ない曲は水野らの調査と同様にあがっており、本調査ではさらに歌ったという回答が少ない曲が増えている。

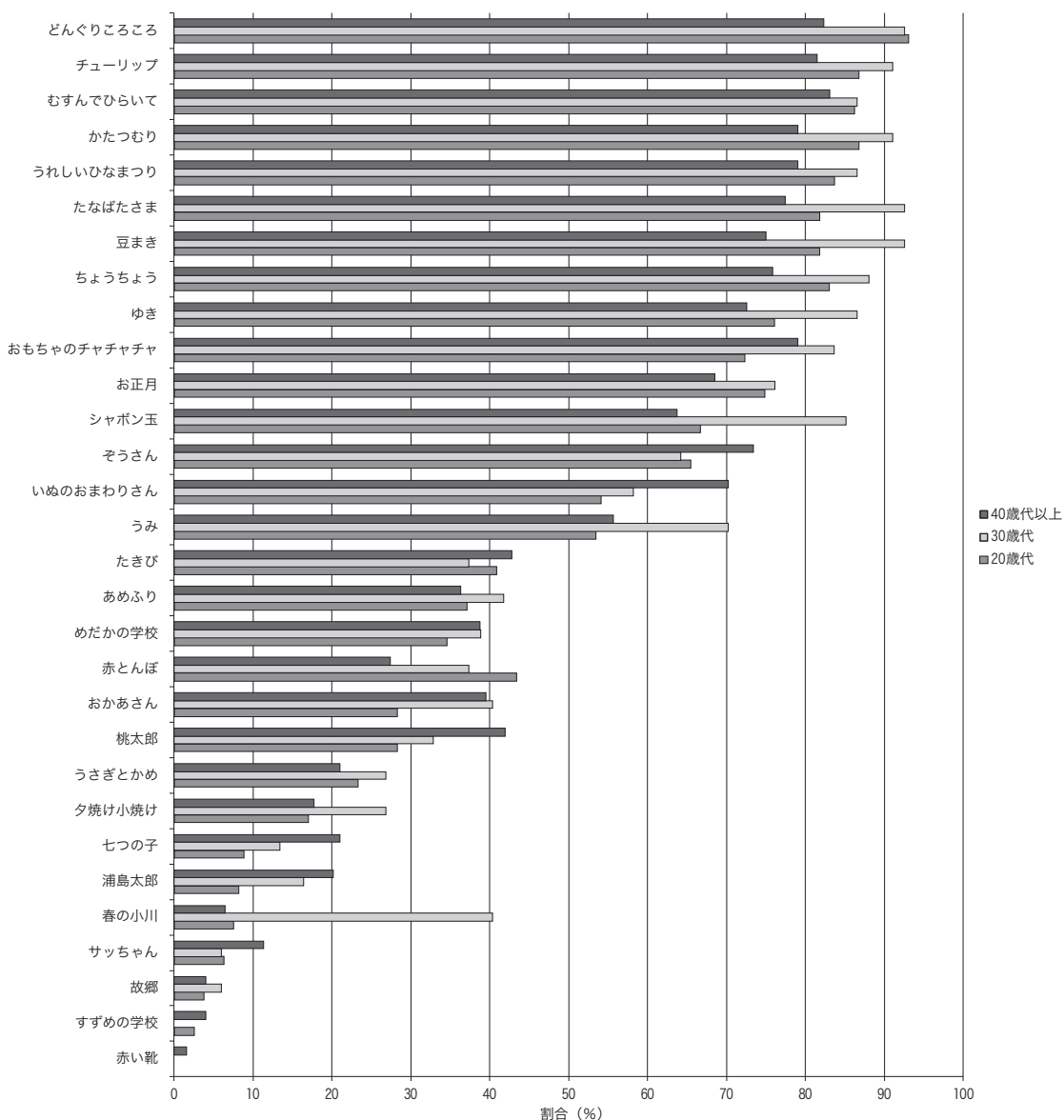


図2 過去2、3年の間に保育活動の中で歌った歌

(3) 保育活動に取り入れている歌について

調査時点までの1ヶ月の間に保育活動の中で取り入れた歌の自由記述（調査項目③）については、表1に示す通り、季節の行事に関する歌（「豆まき」25%（86名）、「お正月」13%（46名）、「うれしいひなまつり」13%（45名））があげられる他、一般的に季節にちなんだ歌があがった。

水野らの調査においても本調査と同様に季節の歌が多い。水野らの調査では7～8月だったこともあって「たなばたさま」「うみ」「シャボン玉」「アイスクリーム」「かえるのうた」（「かえるの合唱」のことだと考えられる—引用者注）があげられており、本調査の結果にみられる歌とは異なるが、季節感が重視されている傾向は同じく強い。

表1 調査時点までの1か月の間に保育活動の中で取り入れた曲（上位10曲）

豆まき	86名	25%
ゆき	54名	15%
お正月	46名	13%
うれしいひなまつり	45名	13%
ゆげのあさ	31名	9%
鬼のパンツ	30名	9%
コンコンクシャンのうた	26名	7%
カレンダーマーチ	13名	4%
ゆきのこぼろず	12名	3%
ゆきのペンキ屋さん	9名	3%

また、テレビやアニメで歌われた歌を保育活動で取り入れている曲の自由記述（調査項目④）では、表2に示すとおり、テレビの子ども用番組の歌が多くあがっている。水野らの調査でも、本調査結果で上位3曲である「アンパンマンマーチ」や「となりのトトロ」「夢をかなえてドラえもん」が同様にあがっている。

表2 テレビやアニメの歌で保育活動に取り入れている曲（上位5曲）

	20歳代		30歳代		40歳代以上		合計	
さんぽ（となりのトトロ）	17名	11%	14名	21%	27名	22%	58名	17%
夢をかなえてドラえもん	27名	17%	15名	22%	8名	6%	50名	14%
アンパンマンマーチ	13名	8%	9名	13%	16名	13%	38名	11%
勇気100%（忍たま乱太郎のテーマソング）	14名	9%	10名	15%	10名	8%	34名	10%
戦隊もの（ジュウオウジャーなど）	15名	9%	3名	4%	4名	3%	22名	6%

さらに、古くからある童謡をアレンジ（登場人物をアニメキャラクターに変えるなど）して歌うことがあるかという項目（調査項目⑤）については、表3に示す結果となった。78%（274名）が「非常にある」あるいは「時々ある」と答えており、年代の差はあまりみられなかった。

表3 古くからある童謡をアレンジして歌うことがあるか

	20歳代		30歳代		40歳代以上		合計	
非常にある	25名	16%	9名	13%	16名	13%	50名	14%
時々ある	94名	69%	82名	72%	82名	66%	224名	64%
あまりない	31名	19%	19名	12%	19名	15%	58名	17%
全くない	9名	6%	2名	3%	7名	6%	18名	5%

アレンジの具体的内容についての自由記述には、「ひげじいさん」の歌を「とんとんとんアンパンマン」として歌詞をアンパンマンのキャラクターにするものが最も多くあげられた（全回答中70件）。その他には、「いっちょうめのどらねこ」（作詞・作曲：阿部直美）をウルトラマンの歌詞に替えたり、「ごんべさんのあかちゃん」をアンパンマンの歌詞にしたりする例が複数みられた。また、「サッチャん」（作詞：阪田寛夫，作曲：大中恩）は、過去2、3年間で保育活動中に歌った歌としては4番目に低い割合（図2）であるが、アレンジ例としては、子どもの名前に置き換えて、子どもの良い面を歌詞に置き換えて歌うという回答がみられた。なお、この自由記述については、水野らの調査では、報告書（水野：2016）に記載がないため、比較はしていない。

(4) 保育の場における童謡・唱歌離れ現象に関するベテラン保育者の意識について

調査では、保育経験が20年以上の対象者（111名）に、日本に古くからある童謡や唱歌を最近の保育の中で歌わなくなってきたと感じるかということについて、「非常に感じる」から「全く感じない」までの5件法で尋ねた（調査項目⑥）。その結果は表4に示したとおりである。「非常に感じる」と「やや感じる」の回答をあわせると87%（97名）であり、ベテランの保育者の多くが保育の場で童謡や唱歌離れ現象を感じていることがわかった。

表4 日本に古くからある童謡や唱歌を保育の中で歌わなくなってきたと感じるか

非常に感じる	27名	24%
やや感じる	70名	63%
どちらとも言えない	11名	10%
あまり感じない	3名	3%
全く感じない	0名	0%

これについては、水野らの調査（水野ら：2016）では67%であり、本調査の87%の方が上回った。

また、「非常に感じる」あるいは「やや感じる」と答えた保育者に対しては、なぜ保育の場で童謡や唱歌を歌わなくなってきたと思うかについて問うた（調査項目⑦）。これらの自由記述を、水野ら（水野他：2016，水野：2017）の調査回答の分類に合わせて集計したところ、表5に示すとおり、「新しい歌が次々に出てくるため、そちらの歌に関心が向く」（61%）、「若い保育者が古くからある童謡を知らない」（59%）、

「古くからある歌には子どもになじみのない言葉が使われている」(32%)が多かった。また、「その他」に関する回答として「最近では環境が変わり、野山や自然・生き物が身近でなくなった」、「若い保育者は子供の音域などを考えずに、テンポのよいものを好む傾向がある」、「若い保育者は、歌詞を知らないことが多い。生活の中で昔ながらの歌が馴染んでいない。子供の頃に童謡をあまり歌っていないためだと思う」という回答があげられた。

水野らの調査における回答例や回答数の順は表5の分類どおりである。本調査においても、水野らの分類どおりの回答が得られ、回答数の順も同様であった。

表5 保育の場で童謡や唱歌が歌われなくなってきた理由

新しい歌が次々に出てくるため、そちらの歌に関心が向く	68名	61%
若い保育者が古くからある童謡を知らない	66名	59%
古くからある歌には子どもに馴染みのない言葉が使われている	35名	32%
古くからある歌は、今の子どものリズム感に合わない	13名	12%
子どもが歌いたがらない	0名	0%
その他	5名	5%

(5) 保育活動で歌を取り入れる際に重視する事項について

水野らの調査にならって、表6に示した事項を示し、それぞれについて日常の保育活動や行事の中で歌を取り入れる際に「非常に重視する」から「全く重視しない」までの5点満点のリッカート尺度で尋ねた(点数が高い方が重視していることを示す)(調査項目8)。

表6から明らかなように、どの年代の保育者も、「1 行事(ひなまつり・たなばたなど)に関連している」ことや、「2 季節感がある」ことを最重視している。また、「9 日本に古くから伝わる歌である」は年代が上がるほど重視しており、「13 最近子どもの中で流行っているアニメや戦隊シリーズで使われている歌である」については20代が最も重視している。

表6 保育活動の中で歌を取り入れる際に重視する項目

	20歳代	30歳代	40歳代以上
1 行事(ひなまつり・たなばたなど)に関連している	4.80	4.76	4.77
2 季節感がある	4.76	4.72	4.73
3 多くの子どもから歌いたいという要望がある	3.84	3.84	3.77
4 リズムがよい	3.91	3.91	4.01
5 あなた自身が好きな歌である	3.75	3.75	3.82
6 身体を動かしながら歌うことができる	3.55	3.37	3.56
7 伴奏をひきやすい	3.38	3.57	3.36
8 家庭で保護者や祖父母と一緒に歌える	3.40	3.30	3.39
9 日本に古くから伝わる歌である	3.38	3.48	3.69
10 幼児用の教育番組で頻繁に取り上げられている	3.25	3.10	3.28
11 定番のアニメの歌である	2.96	2.76	3.15
12 最近流行している歌謡曲である	2.83	2.70	2.62
13 最近子どもの中で流行っているアニメや戦隊シリーズで使われている歌である	2.89	2.39	2.54

水野らの調査においても、「1 行事（ひなまつり・たなばたなど）に関連している」「2 季節感がある」の2項目については、どの年代も4点以上になっている。11, 12, 13の項目で点数が低いのも同様である。年代差がみられる項目については、本調査が9, 11, 13であるのに対して水野らの調査が4, 5, 8であり、一致しない。

(6) 調査項目全般について

以上、本調査においては、水野らの調査結果と、特に歌われている歌や歌われていない歌において同じ歌が重なっており、同様の傾向がみられた。本調査で示した曲中どの年代の保育者も歌えると答えた曲数は水野らの調査に比べて少なく、保育活動の中で使用されにくい曲は本調査の方が多かった。合わせて保育経験20年以上の保育者が歌わなくなったと感じる度合いについては、本調査においての方が強い。また、保育活動で歌を取り入れる際には、どちらの調査においても行事や季節感が重視されている。

つまり、水野らの調査における歌い継がれる歌や歌い継がれにくい歌の傾向や保育現場における歌の採択の視点には愛知でも同様の傾向があると見られ、また、童謡や唱歌が歌われにくい状況や歌われにくくなったと感じている傾向は本調査の方が上回っているといえることができる。

II 歌い継がれているあるいは歌い継がれていない童謡・唱歌の課題

調査で明らかになったこの2, 3年間の保育活動中によく歌われていた童謡・唱歌を再掲すると、以下であった。

「たなばたさま」「うれしいひなまつり」「お正月」「豆まき」「チューリップ」

「むすんでひらいて」「どんぐりころころ」「ちょうちょう」「かたつむり」

また、歌われている度合いが少なかった童謡・唱歌は、以下であった。

「たきび」「あめふり」「めだかの学校」「赤とんぼ」「おかあさん」「桃太郎」

「うさぎとかめ」「夕焼け小焼け」「七つの子」「浦島太郎」「春の小川」

「サッチャン」「故郷」「すずめの学校」「赤い靴」

これらについて、幼児の表現にとっての歌という視点から、再検討する。なお、このうち、「赤とんぼ」「春の小川」「故郷」の3曲は、現学習指導要領において小学校の共通歌唱教材で指定されている曲である⁵⁾ため、幼児期の歌唱教材の検討から除外する。

1. 楽曲分析から

水野らの調査と本調査において、保育活動中においてよく歌われていた童謡・唱歌の一例として「どんぐりころころ」「ちょうちょう」を、歌われることが少なかった童謡・唱歌の一例として「うさぎとかめ」「雀の学校」の計4曲について楽曲分析し、その違いが生じる理由について、楽曲構成上の特徴から検討する。

構成上の分析要素は、1) 調性、2) 楽式、3) 和声進行、4) 歌詞の特質、5) テンポ感・リズム感とする。

- 1) 調性は、長調、短調、旋法の確定を行う。
- 2) 楽式については、4拍子換算で2小節1動機を最小単位とした分析を試みる。4拍子換算の1小節では、拍節的には強・弱・中強・弱の2つの重心が感じられるが、音の動きや歌詞のアクセントにより、真の動機を一つ定めることができる(石桁：2011)その真の動機が2つで(つまり4拍子2小節)1動機とする。
- 3) 和声進行はTSDTで示す。
- 4) 歌詞の特質は、日常の平易なことばや古語、言葉の持つリズムを観察する。
- 5) テンポ感・リズム感は曲調を最も特徴付ける要素として検討する。

なお、これらの歌の楽譜は、一般的に保育現場で使われている曲集から選んだものを参考にした。

(1) 「どんぐりころころ」(参考楽譜 右近義徳編：2014)

どんぐり ころころ

青木存義 作詞
梁田 貞 作曲

どん ぐり ころ ころ どん ぶりこ おい け に は ま っ て さ あ たい へん
I I I V I IV I V

ど じ ょ う が で て き て こ ん に ち は ぼ っ ち ゃ ん い つ し ょ に あ そ び ま し ょ う
I I I V I IV V7 I

- 1) 長調
- 2) A(a+b)A'(a+c)の1部形式
2拍子で書かれているが、16分音符が主体となっているので、聴感としては音価が倍で表記される4拍子と感じられる。
- 3) I-V-I-IV-I-V・I-V-I-IV-V₇-I
- 4) 口語体で濁音によるリズム感が良い。
- 5) 快活

明るく快活で物語性がある。1部形式で繰り返しと変化のバランスが良い。

(2) 「ちょうちょう」(参考楽譜 右近義徳編：2014)

ちょう ちょう

野村 秋足 訳詞
ス ペ イ ン 民 謡

ちょうちょう ちょうちょう なのはにとまれ なのはにあいたら さくらにとまれ
I V I I I V I I

さくらの はなの はなから はなへ とまれよ あそべ あそべよ とまれ
V V I I I V I I

1) 長調

2) A(a+a')B(b+a')の1部形式

2拍子で書かれているが、8分音符が主体となっており1小節中の音数が少なく、聴感としては2小節で一括りの4拍子と感じられる。

3) I-V-I・I-V-I・V-I・I-V-I

4) 平易な単語で口に出しての音の面白さがある。

5) 快活

三度音程と音階進行のバランスが良く、歌いやすい。

(3) 「うさぎとかめ」(参考楽譜 高知県保育士会：2014)

うさぎとかめ

石原和二郎 作詞
納所辨次郎 作曲

もしもしかめよ かめさんよ せかいのうちに おまえほど
I I V7 V7 I I I IV6 V7 I

あゆみののろい ものはいない どうしてそんなにのろいのか
I IV I II7 V7 IV I IV6 V7 I

1) 長調・メジャーペンタトニック

2) A(a+b)B(c+d)の1部形式

2拍子で書かれているが、タッカのリズムが主体となっており、1小節中の音数が少なく、聴感としては2小節で一括りの4拍子と感じられる。

3) I - V - I - IV₆ - V - I · I - IV - I - II - V₇ - IV - IV₆ - V₇ - I

4) 物語を平易な言葉で綴っている。

5) 快活

旋律は小楽節ごとに変化しているが、全体的にタッカのリズムで統一されている。

(4) 「雀の学校」(参考楽譜 リムショット編集部編：2013)

雀の学校

清水かつら 作詞
弘田龍太郎 作曲

ちい ちい ばっ ば ちい ばっ ば

すず め の がっ この せん せい は むー ち を ふ り ふ り ちい ばっ ば

せい と の すず め は わ に な っ て お く ち を そ ろ え て ちい ばっ ば

ま だ ま だ い け な い ちい ばっ ば も い ち ど い つ し ょ に ちい ばっ ば

ちい ちい ばっ ば ちい ばっ ば

1) ドレミソによる4音階

2) a+A(b+c)A(b+c)B(d+d)+a

小3部形式にドドソドソソの動機が前後に拡張された形式

3) I - V - I · I - V - I · I - V - I

4) ちいちいばっばの繰り返しに特徴

5) 快活

小3部形式であるが同一の部分動機を少しだけ変化させて繰り返すので、全体的な変化は乏しい。

(5) 4曲の楽曲の特徴から

以上から、「どんぐりころころ」と「ちょうちょう」は、動機aを繰り返しながら変化する一部形式であり、歌いやすさと変化を感じることができるシンプルな構造になっている。いずれも三度下降する音程から始まっており、歌いやすい。また歌詞も

平易な言葉で情景を思い浮かべやすいものである。またいずれも長調である。一方、「うさぎとかめ」と「雀の学校」は、小楽節が次々と変化したり、あるいは動機が少しだけ変化して繰り返したりするなど、先の2曲に比べて変則的な構造になっているが、リズムや旋律については変化が乏しい。また、いずれも五音あるいは四音による音階を使用している。

これらから、現在に歌い継がれやすい歌は西洋音楽的な形式感のバランスの良い歌であり、四音や五音による音階であったり形式感がなく変化に乏しかったりするものは、取り上げられにくくなっていることが推察される。

2. ヨナ抜き音階の問題

水野らの調査で童謡・唱歌として示した30曲（図1、図2に掲載）は、50年以上前の歌であるため、30曲中17曲はファとシを欠くヨナ抜き長音階あるいはレとソを欠くヨナ抜き短音階でつくられている。「ファ」あるいは「シ」が1箇所だけ入っている曲、いわゆるヨ抜き音階あるいはナ抜き音階も多く、それらに該当しないのは、「どんぐりころころ」「むすんでひらいて」「ちょうちょう」「ゆき」「おもちゃのチャチャチャ」「いぬのおまわりさん」「故郷」「赤い靴」の8曲だけである。

このことは、我が国における童謡・唱歌の歴史を振り返れば、当然のことではある。唱歌は明治初期に学校教育において和洋折衷で用いられたヨナ抜き長音階による唱歌から始まっている。そして、そのような唱歌を批判して始まった大正期の童謡運動の中でヨナ抜き短音階も誕生している⁶⁾。50年以上前の童謡・唱歌には、そのようなヨナ抜き音階を受け継いだ曲が多く存在している。

このような童謡・唱歌について、大宮らは、1985年に「子どもに無理なく歌え、かつて自分も歌った歌であり、子どものための歌として価値が定まっている」と大人は考える」と述べている（大宮・徳丸：1985，100）。大宮らの論は30年以上前であるが、本調査においても、40代以上は30曲中29曲を歌うことができ、20代でも23曲を歌うことができるということは、現代の「大人」の耳にも馴染んでいる曲であるとみることができよう。

しかし、調査によれば、保育活動で歌われた割合が下位の曲は、「赤い靴」以外ではヨナ抜き音階によるもの、あるいはヨ抜き音階やナ抜き音階のものであった。総じて歌われた割合が低かった「桃太郎」「浦島太郎」「うさぎとかめ」など日本昔話にまつわる歌はいずれもヨナ抜き音階でつくられており、七五調の歌詞やピョンコ節の多用など、明治以降わが国で親しまれてきた作風になっている。逆に、先にあげたヨナ抜き音階でない曲（ヨ抜き音階、ナ抜き音階を除く）8曲の中で、「故郷」と「赤い靴」は過去2、3年の間に保育活動中最も使われなかった3曲中の2曲であるが、他の6曲はどの年代においても5割以上の保育者が保育活動中に歌っている。つまり、ヨナ抜き音階でない曲の方が歌われやすいという傾向が見られる。

これについて、水野修好は、1980年に興味深い指摘を行っている。幼児が喜んで

歌う歌として、①わらべうた、②ヨナ抜き音階で主要三和音しか用いていない歌、③長調の音階で作られた歌、④ビートリズムをもち、西洋音階やブルース音階で作られた歌の4通りで実験した結果、④が圧倒的に支持され、②は全く支持されなかったというものである⁷⁾。

大宮らは、このような水野修好の指摘を元に、子どもが最初に模倣によって習得する音組織は日本語の抑揚に従った伝統的な音階であり、この音組織によらない音楽表現は、既成の歌の中で初めて接することになり、その場合、子どもは、唱歌、童謡よりは歌謡曲、テーマソングを、また伝統的要素と外来的要素を合わせもった曲を自分たちの音感覚に合うものとして選択していると述べる（大宮・徳丸：1985，94-112）。前節の楽曲分析において保育現場で歌い継がれやすい歌が西洋音楽的な形式感のバランスの良い歌であったことは、これを裏付けるものであろう。

本調査を依頼した保育者らは、40代以上の保育者で1957～1977年生まれであり、すでに水野修好や大宮らが指摘しているように、幼少期に「伝統的要素と外来的要素を合わせもった曲」を選択して歌っていた世代である。保育者らは、自らの音感覚としてすでにヨナ抜き音階のみに依っておらず、また、子どもたちはさらに「外来的要素」になじんでいるととらえていることが推察される。つまり、日本語の抑揚に従いつつ、現在の既成の歌から音組織を学習している子どもたちの現状をみれば、子どもたちの音感覚としてヨナ抜き音階の楽曲は歌い継がれにくいということができよう。

3. 教材の固定化の問題

一方で、保育活動の中で歌われた割合の高い曲の中で季節の行事に関わる「たなばたさま」「うれしいひなまつり」「お正月」「豆まき」といった曲は、すべてヨナ抜き音階でつくられている（前掲図2）。白石は、保育現場で歌い継がれている歌について、保育現場で取り扱うのに適した何らかの特徴を有しているかもしれないという見方も示しながら、保育現場に「この時期にはこの歌を歌うことになっている」という固定観念の存在や、どの保育教材集にも共通して掲載されているという問題の可能性を指摘している（白石：1989，26）。「たなばたさま」「うれしいひなまつり」「お正月」「豆まき」などは七夕、雛祭り、正月、節分の時期に行事に関連する歌であり、「行事に関連している」ということは本調査で保育活動中に歌を取り入れる際に最も重視されていることでもあった（前掲表6）。これらを考え合わせれば、行事における歌は、幼児の音楽的表現として検討するという以前に、まずは行事に合わせて歌う歌として常套的に用いられているという現状が見えてくる。

また、同じく歌われた割合の高い曲の中で、季節ともかかわって具体的に歌詞内容をイメージしやすい曲として、「チューリップ」「むすんでひらいて」「どんぐりころころ」「ちようちよう」「かたつむり」などがあがっていた（図2）。これらは、季節ともかかわって具体的に歌詞内容がイメージしやすいものであり、ヨナ抜き音階ではない曲も含まれるが、原は以下のような指摘を行っている。「歌詞から来る言葉の類

型化。春の小川はサラサラ流れ、七夕飾りの笹の葉もサラサラと揺れ、どんぐりはドンブリコと池にはまり、雪はコンコと降るものだと。視点を変えて自然科学的に見た時、菜の花に止まる蝶々は桜に止まる蝶々とは異なる種類の蝶であり、菜の花から桜に飛んで行くという事はあるが、実際にそれぞれの花に止まる蝶を見て種類の違いに気付いたとしても、平気で歌いつづけている私たちではないだろうか」（原：2009, 196）。原は、このことから、「本来大人も持っているはずの自然な感性を、ある種の固定観念にとらわれて無くしてしまっているかもしれない現場指導者側の枠組みの中では、果たして子どものいきいきとした音楽表現への意欲を引き出すことの可能な曲目を選択できているのであろうか」（原：2009, 196）と述べる。歌の歌詞から「この季節はこの季節の歌を歌う」ということが定着している様子は、保育活動やカリキュラムで多く目にすることである⁸⁾。本調査で歌われた割合が高かった「チューリップ」「むすんでひらいて」「どんぐりころころ」「ちょうちょう」「かたつむり」などについても、保育活動における展開においては、季節に合わせるという意図だけでなく、子どもの生活のどの場面で歌うか、またパターンの歌詞に対する補遺をどのように行っていくかについて、あわせて検討していかなければならないことに留保すべきであろう。

Ⅲ 童謡・唱歌は幼児にとってどのような学びや体験になるのか

先に見てきたように、童謡・唱歌は、季節・行事にかかわるもの、西洋音階を軸として歌いやすさと変化を感じることができるシンプルな構造のものが歌い継がれやすい状況が明らかになった。また、童謡・唱歌には音楽の構造としてヨナ抜き音階を主としたものが多く、保育現場に用いられる場合は教材が固定化される可能性もうかがえた。

しかし、童謡・唱歌には、一方で、保育活動において、現代の子どもの歌にはない大きな役割を果たす可能性を持っている。

その一つは、保育活動における大人と子どものコミュニケーション的役割である。

保育活動における音楽的活動には、保育者と子ども双方にとっての意味がある。まず、子どもたちにとって、音楽的活動には以下のような点において意味がある。①身体発達の促進、②情緒へのはたらきかけと心的関係性、③コミュニケーションの方法、④概念の形成・認識の深化の支援、⑤人間的諸能力のひとつ。また、大人の側からすれば、①保育者自身の身体や感情への影響、②子どもの統制として意味をもつ（三国・白石・山中：2001）。

歌い継がれる童謡・唱歌は、保育活動においてまず大人の側の①として機能するであろう。大人は、童謡や唱歌を歌うとき、かつて自身が歌ってもらったときの状況を思い浮かべ、感情に影響を受ける。保育活動における場合も同じである。大人自身もたとえば穏やかな感情を得ることができるであろう。保育活動において季節や歌う場

面が固定化されず、子どもの生活場面や心情に即して童謡・唱歌が選択され、子どもたちがそれを受容し、大人や子どもたちで表現を共有することができた場合、大人と子どもが一体感を持った音楽的コミュニケーションの場となることが予測できる。この場合、子どもにとっても②や③の意味が出てくる。白石は「古くから歌われ継がれた「唱歌」は、親や周りの大人が子どもとの心情的つながりをはかるための媒介としての役目を担っている」(白石：1989, 29)と述べているが、まさにその通りの役目を果たす教材となり得るであろう。

また、もう一つは、子どもにとっての⑤の人間の諸能力における音楽的成長や発達にかかわって、子どもたちが主体的に表現していくときの素材となる役割である。

ストーによれば、「誰もが知っている曲からは、連続性と安定性がもたらさ」れ、「共同体験の新たなパターンを創り出す」こともできる(ストー・佐藤他：2001, 41)。ストーが述べるように、子どもは、覚えた歌を表現の素材としてストックし、能動的に表現を創作する存在でもある。童謡・唱歌は、概ね四分音符や八分音符で構成され、細かなリズムやシンコペーション等の複雑なリズムは用いられていない。戦前のものは和声的にも単純でピアノ伴奏によるリードが必要なものも少ない⁹⁾。このようなシンプルな音楽構造は、生活場面で子どもたちがまた子どもたち相互が知っている歌で遊ぶ際の大きな要件である。

たとえば、山中は、2歳児の子どもの歌の観察から、以下のような記録を得ている。

「Tは、家の中で、風呂上がりにおもちゃの太鼓をバチで打ち始める。母親に歌いながら太鼓を打つことができるか、と問われ、…中略(引用者)…母親が「たなばた」¹⁰⁾をリクエストすると、一、二番つづけて歌い、二番を以下のようにアレンジする」(山中：2007, 39)

ささの は さらさら の きばに ゆれて

おほしさま きらきら きんぎん すなご

ごしきの たんざく わたちが かいだ

おほひたま キラッキラッキラッ きんぎん おほひたま おほひた まが キラッキラッ

この場面で、Tはこの歌以前にいくつかリクエストを受け、太鼓をバチで打ちながら歌っていたが、この歌になって打ち方を変え、バチ同士を打ち合うようになっていく。そして、13小節目からはアレンジを加えるとともにバチを置き、手のひらをヒラヒラさせる動作に変えた。最後の2小節は創作で付け加えたもので、加えて両手首を半回転させて終わっている¹¹⁾。

この子どもは、子どもも母親も知っている歌を共有する中で、歌いながら太鼓の打ち方を考え、両手の動作に変え、歌詞やリズムを変える、という創作を楽しんでいる。童謡・唱歌が子どもにとって覚えやすく単純な構造であるがゆえに可能になる一つの例であろう。童謡・唱歌を子どもたちがこのように表現する様子は、童謡や唱歌を季節や行事にかかわって歌うものと固定的な枠組みでとらえては見てとることができない。幼児の表現する姿から実践することがクローズアップされている現在、童謡・唱歌を子どもの表現素材としての役割から選択していくことは重要な視点になると考えられる。

おわりに

保育活動における童謡・唱歌の研究には、大人の思い入れが強い場合が多い。武藤が「長い間良い歌だとして歌われてきている曲を伝えることが大切である」と述べるように、また笠井らが「世代を超えて歌うことの復活」と述べるように、多くの世代が馴染んできた歌が歌い継がれることを願うことは重要であろう。

本稿では、そのような願いはひとまず置いて、童謡や唱歌の音楽構造や保育の展開の問題を指摘し、保育活動における子どもたちにとっての学びや体験から童謡や唱歌を考察したが、そのうち、ヨナ抜き音階についてはまだ検討する余地がある。ストーリーは、「一つの文化で合意が得られているリズムとメロディーのパターン、すなわち歌を唱和することで、ある共通する感情がもたらされ、少なくとも歌が歌われているあいだ、その感情は仲間から仲間へと伝わってゆき、ついには身体も感情に影響されて、皆がまったく同じように反応するのを体験する」（ストーリー・佐藤他：2001、20-21）と述べる。つまり、一体感が生まれるような共有体験においては、「一つの文化で合意が得られているリズムとメロディーのパターン」、すなわち様式の認知が前提として必要である。

本稿で述べてきたように、ヨナ抜き音階を中心とした童謡・唱歌は、西洋音階を主とした音楽構造の歌が多くメディアから流れている現在では、保育者側にとってもまた子どもにとっても必ずしも「合意」されるメロディーとは限らない。本調査では童謡・唱歌においてヨナ抜き音階の歌は歌い継がれにくく、また水野修孝や大宮らの研究においては、幼児期の子どもの歌の興味や音感覚にヨナ抜き音階は存在がなかった。

しかし、ヨナ抜き音階は現代に用いられていないわけではない。現在でも童謡・唱

歌以外にヨナ抜き音階でできた曲は存在しているし、J-POPなどで、日本的な部分を強調したり、覚えやすいメロディーとして強調したりする部分で用いられることは多い。たとえば、2013年に発売されたAKB48の「恋するフォーチュンクッキー」（作詞：秋元康，作曲：伊藤心太郎）の大部分でヨナ抜き音階が使われていることなどは、その典型である。「恋するフォーチュンクッキー」がヒットし、歌われ踊られたことは、まだ記憶に新しい。ストーリーのような「共通する感情」や「同じように反応する」体験をこの曲で得た人は、大人も子どもも含めて多いのである。つまり、ヨナ抜き音階を部分的に使用し、現代のビート感やリズム感、和声進行などを組み合わせた曲は、いわばヨナ抜き音階部分に「懐メロ」的反応を起こすことがうかがえる。

このような現代におけるヨナ抜き音階の存在と、子どもの音感覚の中におけるヨナ抜き音階の不在の関係については、今後の課題である。

謝 辞

愛知県における追調査を快く承諾してくださいました水野智美氏、調査にご協力くださいました保育者の方々、調査実施にご協力くださいました園長先生、副園長先生に心より感謝申し上げます。

■注

- 1) 教育職員免許法施行規則及び免許状更新講習規則の一部を改正する省令の交付について（通知）29文科初第1113号による。
- 2) 文部科学省は、幼稚園教諭の養成の在り方に関する調査研究を一般社団法人保育教諭養成課程研究会に委託し、その報告書を文部科学省HPに公表している。モデルカリキュラムは、その報告書に示されている。
- 3) 文化庁（2007）：親子で歌いごう日本の歌百選，東京書籍。
文化庁が「世代を超えて、みんなで歌を歌うということを復活させる」という趣旨から曲やその歌に対する想いやエピソードなどを募集し、選んだ100曲をまとめたものである。
- 4) 水野智美と徳田克己は、乳幼児教育学会で以下を発表している。本稿における追調査は、水野らの了承の上、水野らの発表資料をもとに行った。
水野智美・徳田克己（2016）：幼児における童謡・唱歌離れ現象1—保育者に対する調査を中心に— 2016年度日本乳幼児教育学会における発表（2016年11月26日，於神戸女子大学）
- 5) 平成29年改訂小学校学習指導要領で、「春の小川」は小学校3年生，「故郷」は小学校6年生の共通歌唱教材として指定されている。また，「赤とんぼ」は平成29年改訂中学校学習指導要領で共通歌唱教材に指定されている。
- 6) 唱歌や童謡の歴史については，たとえば白石（1989）に詳しい。
- 7) 水野修好（1980）：幼児音楽教材論，季刊音楽教育研究22，音楽之友社，101。
水野は「幼児音楽教材論」を季刊音楽教育研究21，22で述べており，大宮・徳丸（1985）も引用している。
- 8) 井口太・笠井かほる・宮脇長谷子（1991）においても，184頁で同様の結果が示されている。
- 9) 白石は，戦後，ピアノ伴奏が伴奏以上の役目を果たす曲が増えているが，ピアノがあるからこそ歌えた歌は，生活や遊びの中で，子どもの口にのぼりにくくなるだろうと述べている（白石：1989，20-29）。

- 10) 「たなばた」は、正確には、「たなばたさま」(作詞：榎藤はなよ，補詞：林柳波，作曲：下総皖一)である。またTの歌においては，創作を意図していない一番の歌詞も正確ではない。
- 11) 詳細は，拙稿「幼児の音楽的行動における情報の心情的関係づけ」(高知大学教育学部研究報告 67, 2007, 39-41)を参照されたい。

■引用文献

- アンソニー・ストー／佐藤由紀・大沢忠雄・黒川孝文訳 (2001)：音楽する精神，白揚社。
- 井口太・笠井かほる・宮脇長谷子 (1991)：幼児の歌唱教材の分析—教材研究としての歌詞分析の方法論に関する一研究—，日本音楽教育学会編，音楽教育学の展望Ⅱ，pp. 176-185，音楽之友社。
- 石桁真礼生 (2011)：楽式論，音楽之友社。
- 右近義徳編 (2014)：幼児の歌12ヶ月《180曲選》，エー・ティー・エヌ。
- 大宮真琴・徳丸吉彦 (1985)：幼児と音楽，有斐閣。
- 笠井キミ子，久原広幸 (2010)：日本で歌い継がれた歌についての一考察—保育者志望学生への調査をもとに—，中村学園大学・中村学園短期大学部研究紀要，42：15-25。
- 梁嶋章子 (1991)：第1節 研究の動向，1980年代の幼児の音楽教育研究とその課題，日本音楽教育学会編，音楽教育学の展望Ⅱ，pp. 140-151，音楽之友社。
- 高知県保育士会 (2014)：おひさま，高知県保育士会発行。
- 白石昌子 (1989)：幼児の歌唱教材選択に関する一視点，福島大学教育学部論集，教育・心理部門，46：17-32。
- 三国和子・白石昌子・山中文 (2001)：保育課程における音楽的活動(1)—保育者・子ども双方にとつての音楽的活動の意味—，日本保育学会大会研究論文集，54：542-543。
- 水野智美 (2016)：幼稚園・保育所・家庭において幼児が親しんでいる音楽の分析—童謡・唱歌離れ現象をめぐって—，平成27年度カワイサウンド技術音楽振興財団研究概要報告書【音楽振興部門】，<http://sound-zaidan.workarea.jp/27R01M.pdf> (2017年11月1日アクセス)。
- 原祐子 (2009)：保育における子どもの歌，四天王寺大学紀要，47：189-205。
- 武藤憲夫 (2008)：唱歌・童謡に関する一考察と教材研究，富山短期大学紀要，43(2)：55-65。
- 山中文 (2008)：幼児の音楽的行動における情報の心情的関係づけ，高知大学教育学部研究報告，67：37-42。
- リムショット編集部編 (2013)：伝えていきたい日本の風景 童謡・唱歌楽譜集，リムショット。